

コロナ禍の芸術文化活動を知り、いま とこれからの社会を考えるための読書 案内

はじめに

1923年の関東大震災、第2次世界大戦、1995年の阪神淡路大震災、2011年の東日本大震災と、日本の芸術文化がこの100年に直面した戦火や災害は様々である。これらは社会を大きく変え、その影響が芸術文化を巡る活動を規定してきた。人々が受ける影響の強弱、大小や種類は様々であった。21世紀に入って移動・通信の発展を経た2020年からのコロナ禍の状況は、地域や世代、職業による見過ごせない差はあるとしても、時空を超えて人々に遍く直接的・間接的に一定以上の影響を与えてきた。それは、ある衝撃的な出来事によって始まった訳ではなく、徐々に私たちの暮らしを侵食し、状況は同時代的に日々変わり、ある時点の知見は度々塗り替えられ、先の状況を予測するのは極めて難しい。畢竟、芸術文化活動も従来の形や規模、流儀を大きく変えることを余儀なくされた。

芸術文化という営為は、優位な感覚である視覚と聴覚のみによらない、嗅覚、触覚なども動員した感覚を総合した活動であり、目的のない行為のなかの偶然の遭遇も重要な要素である。それが、集まること、直に接すること、オンライン化などによって、これまで持っていた社会の中におけるあり方を問い直し、一方にある新しい制作と受容の方法を見出すことが求められた。

本稿は、そのような芸術文化活動が直面した危機や可能性の契機を知り、今後の社会と芸術文化の関係性の行方を探るための心強い資料である、出版物をまとめた読書案内である。単行書と逐次刊行物のうち雑誌を中心に、2021年1月中旬までを大まかな期限として、原則として実見したもののみを取り上げた。主として芸術に関連する文化の領域に関するものを対象とした（いくつか2月以降に刊行されたものにも言及した）。

コロナ禍の出版メディアに見られる言説

ところで、コロナ禍を取り扱う出版メディアの論調としては、例えば、西田亮介『コロナ危機の社会学』（朝日新聞出版、2020年7月）のように、コロナ禍の社会と政治の対応、そしてメディアを巡る状況の横断的分析と課題を論じ、その上で今後の社会の可能性を見いだす議論が主要であり、多数見られるものである。そのような局面においては、「不要不急」な領域に組み入れられてしまいがちなのが芸術文化である。それは、アートにおける表現活動と、社会における政治・経済活動との距離に起因している。

例えば、国立国会図書館の蔵書検索において、2020年から2021年にかけて刊行された、タイトルに「コロナ」を含む書籍（単行書）には747件が該当する（2021年3月4日検索、レーベル名・出版社名などの固有名詞として「コロナ」を含むものもあり）。その多くは、科学・医療、政治・経済、技術・産業、経営やマーケティング、あるいは実用的な生活にかかわる話題など、自

然科学、社会科学のジャンルが占めている。それらに次いで少ないながらも、福祉、教育、都市計画、農業などの関連書籍も散見される。一方で、そのほかの、コロナ禍が直接的な衝撃を与えたであろう領域と比べてしまうと、人文科学、そして芸術文化に関する書籍は、実はそれほど多くはない。

ただし、SNS上では、芸術文化の専門家・関係者間での情報・意見交換が活発に行われた。例えばFacebookの公開グループには、稿者の専門に近いところでは、「新型コロナのインパクトを受け、大学教員は何をすべきか、何をしたいかについて知恵と情報を共有するグループ」（メンバー約2.1万人）、「コロナ禍における芸術文化支援関連情報」（メンバー約3,600人）、「美術科教育を遠隔授業で行うために」（メンバー約1,700人）、「ミュージアムの新型コロナウイルス対応情報共有」（メンバー約640人）などがあり、今日でもコミュニケーションが継続されている。さらに、各種学会・協会等によるオンライン・シンポジウムも多数開催されている。

それでも、本稿では出版メディアに注目したい。この同時代のコロナ禍のタイミングにおいて本を刊行することの意義を考えて見たいのである。この先どうなるかが不確かかつ不明瞭な状況で、日々移り変わる状況や新たな情報もたらされ、以前の知見が上書きされ続ける状況で、その状況自体を含みこんで記録し、発信しておく意味はあるのではないだろうか。コロナ禍の始まりから1年を経たいま、当初の衝撃や緊張感や迫真性は、やや薄らいでいる部分もあるように感じられる。無数に存在するネット上の断片的ではない、編集されてまとまった情報を残していく、出版メディアこそが持つ意義があるはずである。

コロナ禍の芸術文化活動を論じたり言及したりする論考には、大きく分けて下記の3種類がある。本稿では主に①と②を対象とする。なお、1つの論考の中に①と②が混在することも多い。

- ① コロナ禍の社会・文化状況を記録・検証・考察するもの。
- ② 自然・社会・文化に関する既存の知見や理論をコロナ禍への対応に活用しようとするもの。
- ③ コロナ禍を考察する上で参考となるコロナ禍よりも前に刊行されたもの。

③に含まれるものとしては、例えば、千葉一幹『コンテクストの読み方 コロナ時代の人文学』（2021年2月）があり、様々な文脈から対象を読み解く文学研究の方法論で、コロナ禍で注目される文芸・マンガ・映画を考察しようとするものである。

さらに、③に関連するものとしては、ある芸術作品あるいはポップカルチャー・コンテンツ作品を、コロナ禍の社会状況から逆照射使用とするものがある。例えば、一条真也『鬼滅の刃』に学ぶ なぜ、コロナ禍の中で大ヒットしたの

か』(現代書林、2021年2月)は、この状況下で、映画『鬼滅の刃 無限列車編』が興行収入国内歴代1位を記録するなどした理由としては、神道・儒教・仏教の影響があり、本作が新型コロナウイルスに対する現代人にとっての「精神的免疫」であったからとして分析する。このようにコロナ禍の芸術文化のあり方そのものを直接的に論じるのではなく、ある作品をコロナ禍に結びつけて考察しようとする論考群がある。

そういったことを踏まえたいうえで、ここからは、いくつかのパートに分けて、諸文献の読書案内を行っていく。

アートに関する文献

コロナ禍とアートの関係のみを中心的に扱った単行書は、横浜美術大学学長の宮津大輔による単著『新型コロナはアートをどう変えるか』(光文社、2020年10月)がほぼ唯一のものではないだろうか。新書の形式(光文社新書)によって、8月までの2カ月の執筆期間で早急に刊行された(「おわりに」より)。本書では、まず人類史上で芸術に描かれた疫病とコロナ禍との比較が行われ、さらに今日のアート市場への影響が論じられる。さらに今後のアート市場と社会・経済環境について予想が行われている。

次に美術雑誌に目を向けよう。『芸術新潮』は、早い時期から「緊急寄稿シリーズ」として、様々な芸術文化の現場にいる専門家の談話を掲載している。『芸術新潮』(71巻6号、2020年6月)は、「Art News report 緊急寄稿シリーズ 新型コロナウイルスと美術の現場」(100-106頁)を掲載した。ギャラリストの三浦末雄、国立西洋美術館主任研究員の川瀬佑介、ウェブ展覧会を行う「ニコニコ美術館」を手掛けるドワンゴの高橋薫、三菱一号館美術館館長の高橋明也、作家の原田マハが、それぞれの職能からのコロナ禍の記録、各自の立場からの考察を行った。

『芸術新潮』(71巻7号、2020年7月)は、「Art News report 緊急寄稿シリーズ第2弾 新型コロナウイルスと美術の現場」(107-113頁)を掲載した。展覧会事業を手掛ける東映の西澤寛、アーティストの森村泰昌、静岡県立美術館館長の木下直之、「日本のアート産業に関する試乗レポート」を発表している一般社団法人芸術と創造の綿江彰禅、原田マハが寄稿した。

『芸術新潮』(71巻8号、2020年8月)は、「Art News report 緊急寄稿シリーズ第3弾 新型コロナウイルスと美術の現場」(102-109頁)を掲載した。アーティストの李禹煥、産経新聞社事業本部で展覧会企画にかかわる藤本聡、ミュージアムショップのプロデュースを手掛ける開永一郎、美術史家の池上英洋、原田マハが寄稿した。同誌・同号の「Art News interview 日刊コロナアート 横尾忠則へ筆談インタビュー」(98-101頁)は、あるアーティストのコロナ禍に対する反応・対応を示す好例である。マスクをモチーフとした7月13日の時点で170点のカラー作品群《WITH CORONA》を巡るインタビューである。さらに、同号のメインの特集はヨーロッパにある、名画を紹介する「現地を体験!保存版 いつか行ける日のために とてつもない絵」で、コロナ禍と関連付けられた作品案内であった。出版を通じてのあらゆる情報伝達が、コロナ禍とのつながりを持たざるを得ない、見えない強制力が感じ取られる。

『美術手帖』(1084号、2020年10月)は、特集「コロナ禍に考える、ポスト資本主義とアート 作品は商品か? 制作は労働か? 社会は不変か?」(8-116頁)を組んだ。コロナ禍が資本主義のシステムを再考させる契機となり、それはアートにおいても同様であるということで、アートを切り口に新しい資本主義社会のかたちを探るものであった。

2020年9月の『月刊美術』(46巻9号)は、東京・京都に分かれた2作家による「リモート対談 森田りえ子×岩田壮平 「花図」の伝統、そして未来」

(14-22頁)を掲載した。オンライン活動の普及が生み出した、これまでにない記事制作のあり方が示されている。

美術批評誌『リア(REAR)』(45号、2020年10月)は、特集「コロナ禍の文化と生活」(2-78頁)として、23件の論考を掲載する。これらは、美術、演劇、デザイン、ダンス、文学、障害者の表現活動、芸術祭、美術館、ギャラリー、図書館、劇場、映画館などを巡る、表現・展示・伝達に関わる活動の記録・論考であった。

この『リア』の特集に特徴的なように、当然のことではあるが、表現活動としての造形芸術それ自体よりも、それを社会につなげていくミュージアム業界や、即時性・同時代性が重要な公演が必要な芸術である音楽や演劇の領域が、よりコロナ禍への反応を示しているように思われる。

以上のほかでは、宮島達男「アフターコロナの世界 目に見えない傷を癒やす文化芸術の力」『第三文明』(728号、2020年8月、26-28頁)は、コロナ禍において実物のアート作品に触れる方策を検討した。

なお、多数の記事があり本稿では取り上げきれないため、新聞記事は割愛したが、特に各地のミュージアムの具体的な対応などは、各社の新聞の報道によってたどることができる。また、年末の1年を総括するような記事における文化領域の総括も大いに参考となる。例えば、『読売新聞』2020年12月10日朝刊21面の「回顧2020 美術」は文化部・井上晋治「コロナ禍 新たな鑑賞・創造模索」として、主に美術館・博物館の、事前予約性やウェブ展示などの新たな鑑賞スタイルを生み出した動向を振り返っている。

ミュージアム・ライブラリーに関する文献

コロナ禍で休館や活動の縮小、活動の方法の変化を経験することとなった文化施設については、多くの言説が残されている。

『博物館研究』(55巻11号、2020年11月)は、特集「新型コロナウイルス感染症パンデミック下の博物館」(4-42頁)を組んだ。安宅和人「ウィズコロナ、開疎化と博物館の未来」は、「密閉×密」から「開放×疎」つまり「開疎化」の方向に向かい、博物館も対応すべきとする。錦織一臣「新型コロナウイルス感染症パンデミック下の博物館 特集にあたって」は、博物館はデジタル化を得て偶然性を失ったと分析する。森原明廣「江戸時代の古文書に再注目—コロナの時代のヨゲンノトリ」は、江戸時代のコレラ流行に関する歴史資料の、画像申請利用やSNSでの拡散が生み出した広報効果と地域への経済効果を考察する。「新型コロナウイルスと美術館—大阪市立美術館の事例」、佐藤圭一「感染症拡大によりインバウンドを失った水族館運営と課題」、高尾戸美「コロナ禍における科学館運動と感染症の伝え方—多摩六都科学館の事例を中心に」、持田誠「コロナ関係資料収集の意義と必要性」、広瀬浩二郎(国立民族学博物館)「世界をつなぐユニバーサル・ミュージアム—“触”の大博覧会から2025大阪万博へ」、後藤隆基(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館)「演劇が失われた時間—コロナ禍による中止・延期公演の調査と資料収集」、劉陽「新型コロナウイルスパンデミック下での中国博物館界の対応と今後の課題について」では、各館のコロナ禍への対応の実情が示されている。

上記の、山梨県立博物館の事例に関連する単行書として、たかのまさひろ『ヨゲンノトリ やまなし発!令和のコロナ禍に蘇る 江戸のコレラを封じた伝説の預言獣』(協立コミュニケーションズ、2020年8月)があり、ミュージアム(山梨県立博物館)が所蔵する、江戸時代のコレラ流行の様子を、市川村(現山梨市)の村役人・喜左衛門が記録した歴史資料「暴瀉病流行日記」(1858年)に描かれた、2つの頭を持つ伝説の預言獣「ヨゲンノトリ」(山梨県立博物館が命名)の絵を使い、史実に基づいて創作された、疫病克服の物語である。

『ミュゼ』(125号、2020年6月)には、「新型コロナウイルスとミュージアム」に関する複数の記事「ジャーナルミュゼ ミュージアムは今どこにいるのか」が掲載されている。大阪市立自然史博物館・佐久間大輔「コロナ禍の中で、あえてこれからのミュージアムを考えてみる」(20-22頁)では、2020年4月末のミュージアムの現状が整理され、ミュージアムは手法としてのハンズオンから人の心に残る「マインドオン」へ立ち返ること、集客以外の社会とのつながりを持つことを主張する。また、岐阜女子大学文化創造学部の井上遼「COVID-19蔓延と市民への情報提供 パンデミック下の知識循環型社会を支える知識基盤としての博物館情報」(23-24頁)は、ミュージアム休館時のデジタルアーカイブ提供の重要性を論じる。さらに連載である松原雅裕・金田裕子「ハードのチカラ ソフトのチカラ 48 コロナ禍で感じたソフトチェンジの必要性」(34-35頁)は、コロナ禍を契機に、ミュージアムを研究施設と学びの施設の2つに分けることの意義を考察する。

『ミュゼ』(126号、2020年12月)は、特集「コロナ禍とミュージアム」(10-35頁)を組んだ。掲載記事は以下の通りである。多摩六都科学館・高尾戸美、福岡市美術館・鬼本佳代子「SNS ネットワークが拓く、コロナ禍の困難を乗り越える可能性」、兵庫県立人と自然の博物館・橋本佳延「コロナ禍で博物館から失いたくないもの」、国立民族学博物館・邱君妮「台湾における新型コロナウイルスの文化芸術助成対策」、国立歴史博物館・辛治寧「新次元の博物館のつながりー台湾の国立歴史博物館の新たな実践」、山梨県立博物館・森原廣「新型コロナウイルスに負けない博物館を目指してー2020年を将来に活かすためにー」、八尾市立しおんじやま古墳学習館・福田和浩「コロナ禍で変わった小さな博物館の活動についてーしおんじやま古墳学習館のオンライン事始めー」、美濃加茂市民ミュージアム・児見光生「コロナ感染拡大防止休館中のできごとー休館中ですが、「やっています」よりー」、岐阜県博物館協会「こと」部会(中山道広重美術館)・中村香織「岐阜県博物館協会のアンケート調査(概要)より」、目黒寄生虫館・亀谷誓一「コロナ禍における寄付の呼びかけ 予期せぬ反響と支援に感謝」。

ライブラリーについては、専門図書館協会による『専門図書館』(301・302号合併号、2020年10月)、特集「新型コロナウイルス感染対策：図書館の記録」があり、21件の論考(国立国会図書館、専門図書館11館、大学図書館3館、公共図書館2館)と「コロナ禍における企業図書館の対応 アンケート」(21館の回答)を掲載した。

ところで、芸術文化に関わるフリーランスは、組織に所属する専門家以上の影響を受けている。森崎めぐみ「文化・芸術を生き続けよう『女性のひろば』(496号、2020年6月、42-44頁)は、公演中止や撮影中止による俳優・声優の仕事の危機的状況を報告し、国によるフリーランス救済措置実施を訴えた。また、藤井慎太郎「芸術文化から見たコロナ禍とフリーランスの課題」『都市問題』(111巻8号、2020年8月、37-42頁)は、密集の回避が飲食・観光同様に芸術文化に打撃を与えたこと、海外のフリーランス支援制度を紹介し、フリーランスの連携の重要性を説いている。

音楽・演劇・放送に関する文献

『音楽現代』(51巻1号、2021年1月)は、特別企画「コロナ禍でのコンサート事情ー2021年へ音楽を繋いでいくために… 緊急アンケート調査結果報告、2021年開催予定公演一覧付」(69-77頁)を掲載した。宮沢昭男「コロナ禍において、困っていることをあぶりだす 聞く者の立場からの問題提起 演目に頼り過ぎる、限定される演奏者、演奏を聴く場所」は、コロナ禍で明らかになったクラシック・コンサートの保守化の問題を指摘し、実験性の重要

性を指摘する。保延裕史「夢をつないでいこう ウィーン・フィルの来日が音楽会に与えた影響」は、コロナ禍でも感染予防策を徹底することで海外演奏旅行が可能であることを確認している。「緊急アンケート調査結果報告」は、コンサート開催のための感染対策についての情報共有を目的にしており、各施設や団体が行った対策の知見が集約されている。

『音楽の世界』(589号、2020年夏)は、音楽家や音楽の専門家がコロナ禍を論じる特集「新型コロナウイルスを巡って」(2-47頁)を掲載した。収載の論考は、編集部「特集『新型コロナウイルスを巡って』の企画について」、高橋通「新型コロナ・ウイルス感染症流行について」、小宮正安「真の創造力とは何か?ーヨーロッパ史に見る「危機の時代の芸術」から考える」、高橋雅光「音楽家とコロナ」、大武彩子「「パンデミックがもたらした生活の変化と気づき」ー豪州からの現状報告」、中島洋一「予期できぬ事態に遭遇して考えたこと」、三輪真弘「清潔な社会」、浜田宏一「今のオンライン教育、昔の音楽通信教育」、小林紗季子「びわ湖公演『神々の黄昏』に参加して」、草野明子「新型コロナウイルスを巡って」、九十九太一「READAPTION(レアダプシオン)」、小西徹郎「変化していく音楽の価値と大きなチャンス」である。

長木誠司「[ディスク遊歩人 140] コロナ禍とライブ性ー予感と距たり」『レコード芸術』(69巻8号、2020年8月、57-60頁)はドイツでのクラシック・コンサートの積極的なネット配信と、そこに見られる「メディアを通じたライブ性」を指摘する。

『テアトロ』(979号、2020年10月)は、コロナ禍を作中に取り入れた演劇の劇評として、杉山弘「コロナ禍で露見する人間の身勝手さ」(66-68頁)、小山内伸「コロナ禍の現実をしたたかに、しなやかに」(70-71頁)を掲載、さらに犬丸治「歌舞伎座五か月ぶりの再開」(72-74頁)は歌舞伎公演の感染防止を踏まえた運営状況を記録、九鬼葉子「コロナ禍での新しい演劇の発明」(75-77頁)は、オンライン配信や劇場とオンラインを組み合わせた新しい公演を記録した。

仮屋祐一「〈緊急報告!〉④ とにかく生き延びよう そして芸術教室の必要性を訴えよう」(『児童青少年演劇』716号、2020年7月、4頁)は、学校での芸術鑑賞教育の中止状況を報告し、その必要不可欠性を訴えた。

テレビ・メディアをひとつの文化、あるいは文化を伝えるメディアと捉えるならば、放送メディアに関する論考も参考となる。例えば、『放送研究と調査』(70巻11号、2020年11月)は、谷正名・宇治橋祐之「高まるストレスと、デジタル学習教材への関心ー新型コロナウイルス臨時休校・休園時と再開後の、子どもと保護者のメディア行動調査」から①(2-35頁)を掲載している。

『放送研究と調査』(70巻12号、2020年12月)は、高橋浩一郎・原由美子「「新型コロナウイルス」はどのように伝えられたかーテレビとソーシャルメディアの関連の中でー【第1部】データで総覧する報道と投稿の200日」(2-35頁)、宇治橋祐之・谷正名「「オンデマンド化」と「有意義な」時間へのニーズの高まりー「新型コロナウイルス臨時休校・休園時と再開後の、子どもと保護者のメディア行動調査」から②(54-86頁)を掲載した。

『放送研究と調査』(71巻1号、2021年1月)は、七沢潔・東山浩太・高橋浩一郎「「新型コロナウイルス」はどのように伝えられたかーテレビとソーシャルメディアの関連の中でー【第2部】PCR検査・テレビの「議題設定」とTwitterの反応」(2-35頁)を掲載した。

領域横断的な文献に見る芸術文化

コロナ禍に関する論考として多数見られるものは、自然科学・社会科学・人文科学・芸術など、多くの領域の専門家が領域横断的に寄稿する文献である。

農山漁村文化協会編『新型コロナ19氏の意見 われわれはどこにいて、どこへ向かうのか』（農山漁村文化協会、2020年5月）は、そのいち早い時期に刊行されたものである。掲載の論考は、2020年4月7日までの2週間に脱稿したものが大部分で、項目は以下の通りであった。編集部「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）をめぐる動き」（タイムライン）、「Ⅰ ウイルスと人間の関係からみる」、「Ⅱ 日本の対応について考えてみる」、「Ⅲ 日常の食生活と教育からみる」、「Ⅳ 歴史と世界に座標軸を広げてみる」、「Ⅴ パンデミック後の社会に希望をみる」、「いま、こんな本も読んでみたい」（編集部による読書案内）。著者の専門は、哲学、社会工学、作家、活動家、医療人類学、食生活研究家、歯科医、教育、高等学校教諭、探検家、医師、児童文学、ジャーナリスト、文化人類学、アナリスト、環境社会経済学、農家と多様である。

『思想としての〈新型コロナウイルス禍〉』（河出書房新社、2020年5月）は、18件の論考を掲載する。本書も刊行時期が2020年5月と非常に早いことが注目され、多くの論考が4月に執筆されており、この時期に専門家・知識人が世界をどう捉え、どのように思考していたかを知ることができる点で重要である。記された寄稿者の専門や肩書きは、社会学、病理学、生命科学、医学、歴史学、哲学、作家、文筆家、批評家、文芸批評家、社会思想、人類学、そして舞踏家、美術批評家である。

芸術文化との関わりでは、美術批評家の樫木野衣が、災害とアートを論じてきた経験に基づいて、「ポスト・パンデミックの人類史的転換」（インタビュー）を掲載しており、グローバリズムの越境性がアートの市場を拡大したが、同時にパンデミックも引き起こしたと、かつて内なる世界にヒントを得たシュルレアリスム、アブストラクト・アートと同様に、グローバリズムの果てで「家にいてください」にたどり着いた状況では「ひきこもり」がインスピレーションの源になることを論じている。舞踏家の工藤文輝は「流感・舞踏」で、自らの舞踏が母胎にするのは「隔離／阻害」であり、その内側に影響はなかったが、外側の劇場で受け止める人々が失われた、そして古代から演劇は疫病や災害を主題としてきており、自分も同様であるとする。

『現代思想』（48巻10号、2020年8月）は、特集「コロナと暮らし—対策の現場から」を組んだ。含まれる21件の論考の枠組みは、「労働現場から考える」「システムを攪乱する」「家族と「密」」「ジェンダーと〈移動〉」「討議（医療について）」「往復書簡（人類学について）」「ウイルスと〈触れること〉」「感染症と建築」「コロナ時代のエコロジーを問い直す」であった。このうち芸術文化との関係が強いものとしては、建築に関わる西川純司「感染症とともに変わるすまいのかたち」、能作文徳「都市に再接続するための気晴らしの居場所」が挙げられる。

『現代思想』（48巻11号、2020年9月増刊）は、「コロナ時代を生きるための60冊」である。60人の選者による古今東西からの60冊は、次の7つのカテゴリー「歴史から／をまなぐ」「惑星をとらえる」「危機とはなにか」「可視化される暴力」「コロナ時代の政治・経済」「暮らしの現場から」「問いを共有する〈ことば〉」に分類され、選者の論考とともに掲載された。なお、この60冊のなかにはいくつか詩歌や文学はあるものの、芸術論など直接に芸術文化に言及するものは数少ない。

『現代思想』はコロナ禍を様々な観点から扱い続け、続く48巻14号（2020年10月）では、特集「コロナ時代の大学—リモート授業・9月入学制議論・授業料問題」（8-202頁）を組んだ。実は、コロナ禍と教育の関係を論じる書籍は多数あるのだが（コロナ禍での学校教育実践についてなど）、芸術文化との関連では教育は直接的ではないため、本稿では割愛する。

森達也編著『定点観測 新型コロナウイルスと私たちの社会 忘却させない。風化させない。』（論創社、2020年9月）は、2020年の上半期を対象と

した17人による論考集である。表紙では、その後1年半観測を続け、半年ごとに観測結果を書籍化している。ここで取り上げられている分野は、医療、貧困、ジェンダー、労働、文学・論壇、ネット社会、日本社会、哲学、教育、アメリカ、経済、東アジア、日本社会、メディア、ヘイト・差別、難民である。本書の巻末掲載の「新型コロナウイルスと私たちの社会」関連年表は、2019年12月から2020年5月までの海外・日本のコロナ禍の社会の動向を簡潔にまとめたもので、芸術文化の状況を考える際にも有効な資料である。なお、続編である『定点観測 新型コロナウイルスと私たちの社会 2020年後半』は2021年3月15日に刊行予定である。

『コロナ禍をどう読むか 16の知性による8つの対話』（亜紀書房、2021年2月）は、2020年4月20日から7月27日にウェブサイト（HAGAZINE）に「COVID-19〈と〉考える」と題して連載された8組の対談をまとめたものである。人類学、哲学、批評、アート、小説、精神分析、ビッグヒストリー、妖怪、科学史などの専門家が対話し、そこでテーマとなったのは、人と動物、接触と隔離、私と国、既知と未知、心と身体、現実と画像の顔、歴史と神話、グローバルとローカルといった様々な「あいだ」であった。芸術文化に直接的に関係する対談として、ホーメイ歌手・アーティストの山川冬樹と美術家の村山悟郎による「隔離され、画像化された二つの「顔」、その「あいだ」でハンセン病絶対隔離政策とオンラインの顔貌から考える」である。「自粛警察」と呼ばれるようなデジタル技術による市民同士の相互監視、オンライン活動により晒される機会の増加した「顔」と、アートを巡る思考の関連がやり取りされた。

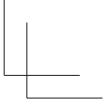
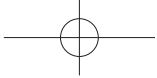
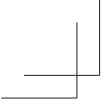
広瀬巖『パンデミックの倫理学 緊急時対応の倫理原則と新型コロナウイルス感染症』（勁草書房、2021年1月）は、感染症に起因する生死に関わる治療・医療についての倫理を論じるものだが、自由の制限に関する議論は、コロナ禍の芸術文化関連施設の運営についても応用できる。

歴史学研究会編、中澤達哉・三枝暁子監修『コロナ時代の歴史学』（續文堂出版、2020年12月）は、コロナ禍に歴史学によって新たな視点を持ち込み、歴史や歴史学自体を問い直すという意欲的な目的を持ったものであった。その構成は「序 問題提起：新型コロナウイルス感染症が歴史に問いかけるもの」、「第1章 感染症拡大の歴史的回検・歴史学の位置」、「第2章 医療史・公衆衛生史のなかの感染症」、「第3章 感染症をめぐる政治と社会の分断・緊張」、「第4章 感染症による現代国民国家の変質」、「第5章 感染症が照らし出す人権と差別」、「第6章 感染症をめぐる格差・労働・ジェンダー」、「第7章 感染症と歴史実践」であった。

山田孝子編著『シリーズ比較文化学への誘い⑥ 人のつながりと世界の行方 コロナ後の縁を考える』（英明企画編集、2020年9月）は、日本社会における「つながり」を比較文化的、人類学的に考えるために、2019年2月の講演会を機に編集が開始されたが、2020年のコロナ禍と同時進行でコロナ禍への各国の対応についての考察が追加され、タイトルにも「コロナ後の縁を考える」が入ることとなった。

以上のように、コロナ禍を考えるための視点のベースとして、人文・社会学の領域では、人類学、思想、倫理、歴史、社会学が援用されることが多い。その中でも人間を総合的・学際的（生物的、文化的）に研究する人類学は、人間の表現行為である芸術文化とも隣接する領域であり、コロナ禍の芸術文化活動を考えるために資するところは大きい。

それを象徴するような1冊が、奥野克巳・吉村萬壺・伊藤亜紗『ひび割れた日常 人類学・文学・美学から考える』（亜紀書房、2020年12月）である。人類学と芸術が組み合わせられて、日常を見つめ直そうとする本書は、人類学者、小説家、美学者のリレーエッセイ、帯のコピーには「熱帯の狩猟民、人間の脳を食らう怪物、植物やマイクロのウイルスと共に、何を問うべきか」とあ




る。巻末に「ひび割れた日常を生きるためのブックガイド」として各著者が3冊、合計15冊を紹介している。

おわりに

以上、コロナ禍で生まれた多様な文献のごく一部を取り上げながら、そこで取り上げられた芸術文化活動の様子を概観してきた。しかし、そもそも芸術文化領域から生まれる作品（創作物）には、より直接的にコロナ禍が表現されていることはいうまでもない。本稿では取り上げる対象としなかったが、コロナ禍の社会のなかでつくられたあらゆる創作物が、必然的に社会のなかの芸術文化を伝えるものになっていることは間違いない。最後にそのことを付言しておきたい。今後刊行される、日本SF作家クラブ編『ポストコロナのSF』（早川書房、2021年4月刊行予定）にも、コロナ禍以降の創作物の行方を見出せるかもしれない。

コロナ禍を主題としたアート作品は登場して久しく、また、創作された物語やメディア・コンテンツ作品のなかで、登場人物やキャラクターがマスクをしていたり、新型コロナウイルスに感染したりするような描写や、コロナ禍を反映したような設定は一般化しつつある。例えば、美術界と贋作を主題とするマンガ作品細野不二彦『ギャラリーフェイク』の35巻（小学館、2020年12月）に収載された「幻のジョルジョーネ」は、2020年のコロナ禍のイタリアを舞台として、イタリア・ルネサンス期に活躍してベストで病没したジョルジョーネの作品を巡るストーリーが展開する。



もう一つ最後に付け加えよう。クリエイティヴ・ラーニングを研究・実践する井庭崇による『コロナの時代の暮らしのヒント』（晶文社、2020年9月）は、大変な状況下での暮らしをよりよくしていくための方法やヒントを、「日常的な創造性」を元に提案する。その創造性とは、まさにアートやデザインなどの芸術文化を支える基礎であり、その中核をなす本質でもあるだろう。コロナ禍あるいはこれからの社会において、私たちに最も近い暮らしにとっても、芸術文化活動が内包する創造性は様々に関与していくはずである。

